

作業のレンズを通してみる社会の課題

高齢住民にとっての作業的公正と作業権とは？ 個人的，社会的視点

エリザベス・タウンゼント¹⁾

堀部恭代²⁾，港 美雪³⁾，高木信也⁴⁾，清水一輝²⁾（日本語訳）

1) ダルハウジー大学，2) 愛知医療学院短期大学，3) 前愛知医療学院短期大学，4) 医療法人香流会 絃仁病院

“世界を変えようと決意を固め，思慮深い市民たちからなる小さなグループの力を
否定してはいけません。実際その力だけが世界を変えてきたのです。”

アメリカの人類学者 マーガレット・ミード

要旨 社会はあらゆるところで，社会の課題を変換し，減らすことができるように取り組んでいる。日本，カナダなど高齢者や障害者に優しい地域で，高齢者がよりよく生きる機会を模索している国であっても，多くの国の高齢者は社会の課題と考えられている。作業のレンズは，人生の最期における意味のある作業の探求を理解する視点など，日常生活の課題に新しい洞察を与えるものであり，多くの個人主義的な視点を持つ素晴らしい概念の贈り物である。批判的な作業のレンズは，現実の生活の中でどのように作業的公正，作業的不公正，作業権が経験されているか（されていないのか）を決定する権力関係に対する社会の視点において，この贈り物を豊かにしている。この論文の第一の目的は，日本の高齢者の例を基に考えながら，公正や権利を見るために，作業のレンズと批判的な作業のレンズを区別することである。もう一つの目的は，特に，作業的公正や作業権を理解し，他者へ伝え，表現するための基礎となる作業的リテラシーについて研究することや日本と世界中の高齢者にとって作業的にちょうど良い世界に向かうために必要な社会の変革を研究することを通して，学際的研究におけるこの視点の有用性（非有用性）を簡潔に検討することである。

作業科学研究，11，12-27，2017.

キーワード：個人主義，批判的認識論，作業的リテラシー，社会分析

第 20 回作業科学セミナーに招待していただき，私の日本への訪問は 5 回目になった。このセミナーの焦点が社会的課題であることは，作業科学と作業療法が，個人の健康問題に非常に注意を向けている時にとても重要である。いくつかの「wicked（ひどい）問題」（Wicks & Jamieson, 2014）を何と云うか決めるために，作業のレンズが，どのように，障害，貧困，移民，環境破壊，そして肥満に関連する，社会的課題の新しい洞察を浮かび上がらせることができるかを想像してみたい。私が今日の対話に取り上げる高齢者に関する社会的な問題は，日本，

カナダ，他の国など世界的に懸念されていることである。

国際的な社会的課題として高齢化について国連（2002）がどのように述べているのかを考えてみよう。世界は，高齢者がいるところにはどこでも起こる，他に類を見ないかつ不可逆的な人口転換のプロセスの真っ只中にある。出生率が低下するにつれて，60 歳以上の人の割合が 2007 年と 2050 年では 2 倍になることが予想され，実際数は 2050 年までに 20 億に達し，3 倍以上になるだろう。ほとんどの国で 80 歳以上の人の数は 4 倍になり，国連は 2050 年には世界的に約 4 億になると想定している。

本稿の目的は、世界経済の構造改革と成熟に向けて扉としての社会的問題と見なされる高齢化を説明することである (Picketty, 2014). 私は 2 つの問いに答えながら、作業的公正と作業権に対する作業のレンズと批判的な作業のレンズについて共有しようと思う。

1. 作業のレンズと批判的な作業のレンズが捉えるのは、どのような範囲なのか
2. 特に、日常生活における正義と権利における作業的リテラシーの発展、そして社会変容のために、作業的公正と作業権の学際的な研究にとって、私たちの作業的範囲の有用性は何か。

私の主張は、作業のレンズは多くの個別化された日常生活の豊かで複雑な詳細についての、前方に広がる見方を提供できる。それに対して、批判的な作業のレンズは、多くの社会の背後にある景色、つまり生活のオプションと限界を決定する力を管理する構造、政策、その他の条件といった見方を提供することができる。この議論の 2 つの部分は相互に結びついており、補足的である。作業のレンズが文脈における作業の物語を確実に表現するかもしれない。逆に我々が批判的な作業のレンズによって示すことができる、マクロ環境や社会全体の説得力のある分析は、加齢における議論で、ここで示されることにより、日常生活の物語の中で最も潤沢である。

ナラティブの研究者は作業の物語とプロフィールを発展させるために作業のレンズの大きい個々に合わせられた焦点で私の論議を詳細に述べ、そして批判することができる。同様に、我々は理論と重要な認識論のための方法を開発するために長い議論をすることができた。ここで、私が主として理論と毎日の世界の社会構造を調査するために施設内エスノグラフィーの方法を 20 年以上行った時に、私はインスピレーションを引き出した (Smith, 2006; Townsend, 1998, 2012, 2015; Townsend, Langille, & Ripley, 2003; Proding, Rudman, & Shaw, 2013). 最近の私の分析では、批判的教育、クリティカルリテラシー、批判的老年学に関連する高齢化に関する教育的、批判的、フェミニスト的な視点を取り入れている (Darville, 1995; Findson, 2007; Formosa, 2005, 2012; Knobel & Lankshear, 2014; Stibbe, 2012).

この第 20 回目のセミナーで作業科学を推進するために、ポートランド、メイン、USA において開催された、米国の作業科学研究会 (SSO) とカナダの作業科学研究会

(CSOS) の共同の学会にて 2 カ月前に提起されたアイディアと文献と、そして私自身の生活経験について述べたいと思う。私は 2 つの質問に答えるために、Hanceef (2013) の「研究統合」アプローチを文献と併用した。

公正と権利の発見

公正と権利を捉えるレンズの独自性を検討する前に、私たちが公正と権利に関心を見出した方法を考えてみていただきたい。どこで？いつ？どのように？私は、保健、地域領域といった様々な領域において長期間実践した後に、作業療法の大学教授として、作業科学と健康の作業的見方を発見した (Wilcock, 1998). 私の本当のターニングポイントは Ph.D. の論文で、1993 年に作業療法のカナダのジャーナルで発表した作業療法の社会的ビジョンを明らかにした時だった (Townsend, 1993, 1998). 作業療法実践を推進する根底にある社会的ビジョンの私の発見は、1989 年から 2013 年にかけて出版されたクライアント中心の実践のための第 8 版のカナダのガイドラインと作業の可能化 (Townsend & Polatajko, 2013), そして他のプロジェクトに取り入れられた。

作業的公正と作業的不公正の私の発見は 1990 年代後半だった。その頃、Ann Wilcock と私はサウスオーストラリアのアデレードで初めて会いランチを共にした。我々は作業療法士がなぜクライアント中心の実践を可能にしないのかについて話をした。その時、作業療法には、身体の機能障害を治療するための個別化された、医療的な、コンポーネントベースの枠組みを受け入れ、ほとんどより公正な社会参加を可能にすることはないという専門職の傾向があると気づいた。白人、そして教育を受けたカナダの女性であるという私自身の特権的な立場の層が見えるようになり、今は意識が高まっている。

あなたはどうか？私は、読者の皆さんに、これらのアイディアを発した場合、作業療法士や作業科学者として仕事の中でどのように公正と権利への関心を発見したかを考えてみていただきたい。どこで？いつ？どのように？そして、どのような特権的な立場で作業的不公正と権利を見ているだろうか？

ミサオ・シマムラさんの事例

しばしば起きる物語から始める。93 歳のシマムラミサオさんは、日本において労働者階級の人生を送っている (Marlow, 2016). 彼女は、特定の場所のグループでの高齢の女性や、世界の高齢者する人々が実際にどのような

生活をしているかについて、よく考えるように促す。彼女の快適な日常生活は、先進国と発展途上国の多くの高齢者にとって想像を絶するものである。彼女に関する新聞記事では、彼女は長い間パートタイムで、ホテルで働き、65歳で、フルタイムで管理人として働き始め85歳になってはじめて引退した。

亡くなった夫は理容師であった。彼が亡くなったとき、彼女は3人の子供に負担をかけることを心配した。彼女は現在3人の子供たちに負担をかけることなく、快適に、日本の介護保険プログラムによって支払われる高齢者アパートで過ごしている。増大するケアの必要性に伴って、自宅訪問から食事、保護、予定された活動、と気配りのある病院の長期の介護病棟に移った。

公正と権利を見る作業の レンズの範囲はどのようなものか？

本稿の私の第一の目的は、作業のレンズと批判的な作業のレンズの範囲を区別することである。2012年、Njelesani, Tang, Jonsson, and Polatajko は、「人間のすることを見る方法、あるいは考える方法」(p233)として本質的に個人の作業の視点を提供した。作業のレンズは、ニュージーランドの先住民の Wright-St Claire (2012) の研究のように、日常生活の中で個人にとって重要なことを研究するための作業的視点とみなされることがよくある。作業的なレンズが作業的な視点を与えてくれる。それは日常生活の作業的観点でもある。言い換えれば、私たちは、日常生活とそれを形作る文脈について話し、書き、思考する豊かな作業的リテラシーを開発することができる。私たちは日常生活の社会的状況を説明するのに必要なリテラシーを使って、日常生活を視覚的に、または他の方法で表現することができる(Townsend, 2015)。社会的インクルージョンの倫理的な立場で、私たちは日常生活がどのように意味があるのか、そうではないのか、あるいは他のものよりも公正に、または不当に、不正かを見ることことができる。作業のレンズで個人の生活を見ると、貧しい人々や障害者など、特権的な立場にない人々の生活の可能性を創り出す作業権を進展させるために、想像し、取り組むことができる。そして、それを理解し、誰もが権利を尊重される公正な社会を損なうような制限に抵抗するために行動する。したがって、作業のレンズが利用可能であれば、学際的な研究のために、人類学者、地理学者やその他の学者と研究協力関係となり、高齢者の日々の経験における人々の作業を見るために、作業のレンズを使用することができる。

このレンズを通して見ることができる1つのイメージは、一人で、または、カップルやグループの中にいる個人である。作業のレンズは、シマムラさんが西洋でよく「活力ある高齢化、あるいは地域居住」(Johansson, Rudman, Mondaca, Park, Luborsky, Josephsson, & Asaba, 2013). といわれるような作業を通して行い、存在し、属している姿を見るだろう(Wilcock, 2005)。もしも、私たちが、高齢の個人を評価しているならば、高齢者がどのように体、心、スピリットを活発にしておくのか尋ね、観察したいと思い、そして高齢についての彼らの感情と洞察を訪ねるだろう。高齢者は、中年から終生までのあらゆる年齢である可能性がある。皆さんは日常生活について高齢者を観察したり、インタビューしたり、調査したりすることができる。私たちの作業のレンズは、シマムラさんや他の人々が、いつも他者のために存在しているのではなく、自分がどのような存在であろうとしているのかを理解する助けになるはずである。彼らがマーケットに行き、旅行をして、孫たちの世話をし、趣味をはじめて、何かの会合や他の市民としての作業に貢献するのを見たり、聞いたりするだろう。仏教あるいは他の宗教に関わらず、精神的な感覚を呼び起こす作業、有意義であること、あるいは意味のないことを見出した作業について話すかもしれない。自己達成を追求し、社会に参加し、個人の人格として自律性を保持し、孫や他の高齢や地域の人たちの面倒をみるときに、本当の自分自身になる機会を持つ。それらの作業は、作業療法サービスを必要とする場合、または作業科学の物語やその他のデータに取り込むことができる場合、私たちと協働することができる社会の市民として属することの個人的な感覚を作業は促進するかもしれないし、促進しないかもしれない。

個人を見る作業のレンズで、私たちは、シマムラさんの給料を得ていた作業とその他の作業が、どのように人生の変化と損失とに関係しているのかなど、特定の作業上の問題とその環境について説明することができる。私たちは、シマムラさんや他の人に喪失、悲しみ、喜びなどの感情の経験についての考えと感情を、創造的な芸術を通して表現してもらうこと、あるいは変化を評価するための正式な評価を終えることで、作業を観察することができるかもしれない。作業のレンズは、視力損失、聴力損失または触覚の損失といった感覚障害を理解するかもしれない(Bailliard, 2016)。作業のレンズの価値は、例えば読書、訪問、家事、またはコミュニティ参加のような作業における喪失という変化を見るということである。作業の中断は、社会において、皮膚アレルギーから重い癌、たとえば新

しい地位や新しい作業的アイデンティティを必要とするパーキンソン病のような神経学的状態まで、どのようなものでも関係しているかもしれない。高齢者の中のこうした人々は、作業の可能性が遠ざかるにつれて希望を失い諦める代わりに、理想的には、何かを行い、何者かになり、なっけいき、集団に所属し続けたいと思うかもしれない (Bailliard, 2016)。たとえば、視力、聴力など感覚機能の喪失は、作業的な選択を大幅に減らすかもしれない。高齢のドライバーが運転免許証を放棄しなければならないことがある (Stepaniuk, Tuokko, McGee, Garrett, & Benner, 2008)。高齢者が何を着て、どんな食事を用意するのかを家族またはスタッフが選択をするとき、作業選択の喪失を見ることができらるだろう。高齢者がグループ活動のために集められたり、グループでの外出で素晴らしいかもしれない場所に連れて行かれたりする。私たちは、作業的公正と実践の理論を橋渡しすることで、作業的不公正を見ることができらる。つまり、もし彼らが屋内か屋外で、社交的な活動をしたいと願うならば、まったく選択肢がない (Nilsson & Townsend, 2010)。

本質的に、作業のレンズは高齢者の人々がどのように毎日の生活と生活の変化を経験するかを見ることができらる。私たちの作業のレンズは素晴らしいもだが、医学的文脈で体と作業遂行を見るために主に使用するレンズを越えた発展をまだしていない。このレンズは、人々の生活の作業の経験の豊かで奥深い光景の創造をもたらす。しかし、特に、権力関係が他者の公正と権利を促進したり弱めたりするためにどのように働いているかを見るために、広範な体系的な文脈の生活を理解するための批判的分析は欠けている。

公正と権利を見る批判的な作業の レンズの範囲はどこまでか？

批判的作業のレンズの範囲は、日常生活の話から始まり、あるいは描かれているかもしれない。しかし、作業のレンズとの単純な違いは、批判的レンズは、日常生活が権力関係によってなぜこのように構築され、なぜこのように統治されているかの問いに焦点を合わせていることである (Cutchin, Aldrich, Bailliard, Coppola, 2008; Laliberte Rudman, 2014; Farias, Laliberte Rudman, & Magalhães, 2016)。作業の可能性と限界を決める支配的なイデオロギー、建物、政策、予算、法律によって、批判的な作業のレンズで、私たちは日常生活への影響と相互関係性をプロファイルし、分析することを気付かされる。

Farias, Laliberte Rudman, Magalhães (2016) が議論したように (私は強く同意している)、社会に埋もれている作業的不公正と作業権を見るために批判的な作業のレンズを必要とする。私たちは作業と、公正または不公正の多様な定義を受け入れる必要もある。Ann Wilcockと私は、作業的不公正の定義を1つに定めなかった。それは、文化における価値、平等をめぐる哲学、信念を含む文化的な背景によって異なるからである。2004年と2013年に発表した定義は (Stadnyk, Townsend & Wilcock, 2010), 「人々が意味と有用性を見出した作業に参加することを、禁止、監禁、隔離、未開発、中断、疎外、排斥、悪用、排除などにより制限される」時に、作業的不公正が起きてくるというものである。

批判的な作業のレンズによる権力の捉え方は、日常生活と社会の分析を結びつける計り知れないものである。権力の分析は、このような現状を引き起こす社会や政府の施策について、疑問をもって日常生活を語ることから始まる。権力を分析するための出発点は、日常生活の物語であり、生活を特定の状況において特定の方法で働かせる社会的または政府的慣習についての質問であり、逆に、政策、法律、経済分析は、利益を得ている人々のための日常生活への参加の現実を描くことになる。このような日常生活の文脈指向の視点から、私たちは、当たり前の文化的規範や日常的な社会の規制に基づいて、支配的なイデオロギーやイデオロギーが各政策や構造に埋め込まれる傾向を見て取ることができる。

西洋の社会における、そしていよいよ東洋における、医学的イデオロギーの優位性は保険サービスに限ったことではない。高齢者は、自宅で社会的なサポートを受ける際や、高齢者住宅への入居の際や、運転免許資格を得る際などに、その作業をするための能力の判断に医師の意見書が必要である。医師は作業の専門家ではないにも関わらず、作業的能力を理解している作業療法士が車椅子や自助具を処方する権限を与えられるかもしれない。しかし私たちには、高齢者施設への入所を承認する力を主張するような権限はない。

高齢化、公正と権利に関する批判的作業のレンズの範囲を見るために、高齢者が暮らしている場所が、ジェンダー、経済的階級、文化、あるいは宗教に関して多様性をなぜ受け入れられるか、受け入れられないかを問いかけたくなるかもしれない。家庭や施設で、さまざまな能力をもつ高齢者が、安全に気を付けながら、さらに年を

重ねたときに、意味あることをするために、彼らの能力と望みに見合う新しい習慣や日課をどのように作り上げることができるか、問うことができる (Johansson, Rudman, Mondaca, Park, Luborsky, Josephsson, & Asaba, 2013). 高齢者虐待と依存が持続する状況を特定するかもしれない。批判的な作業のレンズで、これらの社会問題がなぜ続くのかについて問うことができる。

人間の作業に対する社会—文化—政治的な影響に関する知識を用いた皆さんの批判的な作業的分析は、新しい知識と行動のためのロードマップの両方を示す。たとえば、皆さんの分析が、アクセス可能な、手ごろな価格の交通機関が、日本の一部のある地域で慢性症状と障害のある地方に住む高齢者の地域参加を制限することを示すなら、皆さんはその県の交通機関の改善と高齢者の参加に向けて社会的変革のための政策と、法律と資金を特定することができるだろう。

以前、Ann Wilcock と私は (Townsend & Wilcock, 2004; Wilcock & Townsend, 2000) 作業的不公正として 4 つの社会問題を名付けた。最近の概念的レビューと現時点までの作業的公正のアイディアのマッピングは、アイディアを創り出すことを超えて思考を推進するためのタイムリーなものである (Durocher, Gibson, and Rappolt, 2014; Durocher, Gibson, Rappolt, 2014; Gupta, 2016; Malfitano, de Souza & Lopes, 2016). また私たちは 4 つのコンセプトの創設範囲を使用して、批判的レンズを使って、シムムラさんが、アクティビティが出来、支援が受けられる介護施設で作業疎外を経験するか尋ねることができる。作業疎外とは、高齢者を意味のある作業から疎外された状態にしたままにしておく構造とシステムである。たとえば、インターネットをする際、新しい機器や知識が必要であるのに、学ぶための機会がないなら、高齢者は日常的に作業疎外を経験する。

シムムラさんたちは、高齢期になって作業剥奪を経験しているだろうか。作業剥奪は、介護施設にいる人すべてに起きている。健康な体と心と精神を必要とする作業への参加が制限されている場合、老齢期の作業剥奪は存在する。限られた交通手段や限られた地域のアクセシビリティのために、高齢者の社会参加が妨げられる場合、日常生活において作業剥奪が起こるかもしれない。

作業周縁化は、作業への参加が制限された結果起こる Ann Wilcock と私が名付けた 3 番目の社会的問題である。シムムラさんは、作業周縁化を経験しているかもしれない。

しかし、世界中には、例えば、個人に合わせた作業療法を行う在宅ケアの不足のような、高齢者にとって保健、社会的、教育的サービスが限られている多くの場所がある。

4 つ目の社会問題は、作業不均衡である。高齢者がすることが極わずかにしか無いか、意味あることをすることがなく、自宅や施設で、ただ座っている時、作業不均衡は起きているかもしれない。反対にシムムラさんのような高齢者が、共働きの親をもつ孫や親のいない孫を育てている場合、することがあまりに多く途方に暮れている。

作業的不公正を考えると、構造的な状態はどのようにシムムラさんや他的高齢者の作業を制限するだろう？作業は、自律性、自己実現、望む作業への参加と肯定的な作業的アイデンティティと尊厳の維持を可能にするだろうか？例えば、皆さんは、すべての人がうまく地域に参加するためにデザインされた高齢者に優しい町や都市を知っているだろうか。

作業的公正と作業権の学際的な研究にとって、 この範囲の有用性は何か？

本稿における 2 つ目の目的は、特に日々の生活における公正と権利における作業的リテラシーの発展、そして社会変容にとっての、公正と権利を見るための、私たちの作業のレンズと批判的な作業のレンズの範囲の有用性あるいは有益性に対する疑問に答えることである。これを知ることでは何が出来るだろうか？

まず、リテラシー教育のための私たちの作業的視野の効用を検討する。この知見の重要な有用性とは、ある種のリテラシーをもって何かをしようとすることで、気軽さと能力が発達していくことであると考え。2014 年のルースゼムケレクチャーでは (Townsend, 2015), 日々の生活における作業的公正、そして加齢について考察するための批判的な作業的リテラシーを紹介した。人は作業科学が意図することの大きさが理解されていない場所では、“作業”という言葉を使う必要はない。リテラシーとは、作業が仕事としか理解されていない時日々の生活について考え、話すための専門用語を見つけること、そして日々の生活における不公正のわかりやすい議論を伴う対話を始めることを意味する。

私たちが作業的リテラシーを使うことができるであろう、教育内容、場所、聴衆のための 4 つの鍵となるポイントを示す。

表 1：若い人々のための作業的公正と権利における作業的リテラシーのための教育
作業科学者などの人が日々の生活の詳細について考え、日々の生活について他の人と話し、そして日々の生活について記述し行動を起こすために作業的リテラシーの研究と実践が必要不可欠である。例えば、高齢者のふるまい、感じている意味、変化するアイデンティティなど、身体測定や認知機能検査を行うことを超えた他の特徴を作業のレンズでとらえた洞察を、医療サービスや地域のチームのメンバーと対象者に教育することができる。また、研究のための批判的な作業のレンズの使い方を学ぶことにより、研究疑問を形成することができる。
作業的リテラシーは日々の生活から出てきたものにおける批判的な疑問に答えるために用いることができる。高齢化していく人のために、人々が意味を見い出せる作業のない生活をしている場所で、潜在的な作業的剥奪を見つけることができる。
例えば高齢者施設にガーデンを導入するために、日々の生活を形作る力を分析し、社会変容において他者と共に参加する際に生じるリスクにどう対応するか考える。
作業的リテラシーと批判的な作業的リテラシーは、社会のある集団がある作業を行う特権をもつことを許されているといった社会的公正を見るために役立ち得る。 高齢者には、自分の家で必要とされる支援サービスを受けながらの地位居住のための資源があるであろう。しかし、シェルターで地域居住しているホームレスの高齢者は単に生きているにすぎない。

皆さんが医療システムにおいて病気の過程を理解し、医学用語を使用し、医学診断から生活機能を解釈し、作業療法対象者と関わるために *医学的リテラシー* も必要とするのであれば、発展的しつつある *作業的リテラシー* と *批判的な作業的リテラシー* が多くのチャレンジをもたらすだろう。しかし、加齢に関してユニークな貢献をするための日々の作業における詳細と影響について考え、話し、書くために作業的リテラシーを手にするに喜びを感じる可能性がある。

次に社会変容を駆り立てる行動のための私たちの作業的見方の有用性を検討する。Rudman の 2013 年のルーズゼムケレクチャーは、批判的な作業のレンズが私たちの研究において作業的公正と作業権を明確にし、擁護すると期待され得るという私の論点を補強する。あまりにたくさんのあることがあるが、しかし、私たちが興味の作業的視点を描写へと持ち込む以前にすでに複雑である公正と権利についてのアイデアを使う多くの挑戦がある (Bailliard, 2016; Sen, 2009)。特に、私たちが認める必要があるのは、作業が健康を促進しないかもしれないことや、作業的不公正についての事柄にヘゲモニーの進行中のダイナミクスが認識されていないかもしれないということである。ヘゲモニーとは、私たちが社会変革を進めることを望んだとしても、既存の社会秩序を強化する傾向のことである。

2 人の日本人著者と作業のレンズと批判的作業のレンズの利用に基づいた社会変容の豊富な例を含んでいる「*Occupational Therapies without Borders (境界のない作業療法)*」の第 2 版は、「*Integrating Justice with Practice (公正と実践の統合)*」(Pollard & Dikaos, 2017) という副題である。シマムラさんや他の日本の高齢者にとって、社会的構造や経験が適切であるかを、学際的な研究で調べることができる。例えば、新幹線には車椅子専用のスペース(必要に応じて個室も用意される)があり、トイレも車椅子用に十分な広さがあることが広く宣伝されていることはご存知だろうか。2000 年には、シマムラさんのストーリーに出てきた介護保険法が可決された (Marlow, 2016)。

最後に、学際的な研究における我々の作業的な範囲は 2002 年に採択されたマリッド国際行動計画に共鳴していると考えている。政治宣言とマリッド国際行動計画には次の様な記載がある。“すべての世代のための社会とは、高齢者が社会に貢献し続ける機会を提供するという目標を含んでいる。この目標に向かって働くために、彼らを除外するか、あるいは差別するものは何でも取り除く必要がある。”

作業的公正と作業権を改革する研究や実践に取り組む程、作業科学者や作業療法士たちは研究において、そして社会全体で、不平等に対する主張をするためにリスク

を受け入れ、恐れず力を発揮するだろう。高齢化問題において、社会の課題と社会の利点の双方をみることで多くの解決策が見つけられる。

作業的不公正に対する社会的改革の促進へ強く結びついているのは、作業的不公正が作業権をいかに侵害しているかを示すことである (Hammell, 2015a & b)。高齢者の作業権について十分に議論するには、この提唱に加え別の論文が必要である。日本では、コンビニエンスストアローソンのホームページに次のような広告がある。「65 歳以上の人のうち、1 人、または 2 人の世帯の割合は、1990 年の 36.9% から 2007 年には 52.3% に増加して、現在も 1 年につき 100 万人以上急増しています。」1 万 2 千の店舗を持つ東京に本拠地があるコンビニチェーン店にとって、国の高齢化社会は現実的なものであり、ビジネスチャンスでもある (Picketty, 2014)。また、作業権を侵害する可能性があるだろう。

日本に関するデータとして、高齢者のための国連原則 (1999) を確認することを勧める。これには高齢者のための 18 項目の権利が挙げられており、自己実現の権利、社会参加の権利、必要に応じてケアを受け他者をケアする権利、尊厳を保つ権利の 4 つのカテゴリーに分類されている。不公正と権利が結びつけられていることを認める際、Wilcock と私 (2004) は作業的公正の条件を反映して 4 つの権利を名づけた。作業を意味と豊かさとして経験する権

利；作業参加を通して発達する権利；作業選択を通して自律性を主張する権利；作業をすることから利益を得る権利；これらの作業権は国連原則に共鳴するように思われる。作業権は世界作業療法士連盟 (WFOT) の人権に関する声明においても異なった言葉で表現されている。人権に関する国際諮問グループ (IAG) の Clare Hocking (ニュージーランド) 博士との WFOT 共同議長として、読者の皆さんに、人権に関する作業に向けられる関心としてのこの短い提唱を追及することを強く推奨する。我々が社会変革のための行動に高齢者の社会的包摂を組み込みこむことができると期待している。

まとめ

作業のレンズと批判的な作業のレンズを区別することで、作業のレンズは日々の生活における不公正、権利の侵害についての個人的な経験の大きさを示すことができる。しかし、高齢化していく人を含めた様々な人に対する作業的公正や作業権の侵害を真に捉えるためには、批判的な作業のレンズを用いる必要がある。高齢化していく人を含めた様々な人のための作業的公正や作業権の向上のための実践を発展させるために、我々は考えること、話すこと、書くこと、社会的な行動社会変革を起こす市民であることで作業的リテラシーを学ぶことができる。…高齢者を含むすべての人々にとって作業的にちょうどよい社会のビジョン目標に向かって。

Social Problems Through an Occupational Lens: Occupational Justice and Occupational Rights for Japan's Aging Population? Individual and Societal Perspectives

Elizabeth TOWNSEND

Dalhousie University

*"Never doubt that a small group of thoughtful, committed citizens can change the world.
Indeed, it is the only thing that ever has."*
American anthropologist Margaret Mead

Abstract Societies everywhere grapple to transform or reduce social problems. Aging populations in Japan, Canada, and many other nations are often viewed as a social problem, even as countries seek opportunities for older people to live well in age-friendly and disability-friendly communities. An occupational lens is a unique conceptual gift with a largely individualistic perspective, offering new insights on daily life issues, for instance to understand those searching for meaningful occupations to the end of life. A *critical* occupational lens enriches this gift with social perspectives on the power relations that determine how occupational justice, occupational injustice and human rights are (and are not) experienced in real life. My first aim in this paper is to differentiate the scope of an occupational lens and a critical occupational lens to see justice and rights, considering the example of Japan's aging population. My other aim is to briefly consider the utility (usefulness) of this scope for interdisciplinary research, particularly for studying *occupational* literacy as a foundation for understanding, telling others, and displaying occupational justice and rights, and for studying the social transformations necessary for moving toward an occupationally just world for aging populations in Japan and worldwide.

Japanese Journal of Occupational Science, 11, 12-27, 2017.

Keywords: Individualism, Critical epistemology, Occupational literacy, Social analysis

Your wonderful invitation to the 20th Occupational Science Seminar enticed me to return for my fifth visit to Japan. The focus in this seminar on *social* problems is very important when occupational science and occupational therapy have given so much attention to *individual health* problems. Imagine how an occupational lens could raise new insights on *social problems* associated with disability, poverty, immigration, ecological destruction, and obesity, to name a few "wicked problems" (Wicks & Jamieson, 2014). The social problem I will use for today's dialogue is the global concern in Japan, mirrored in Canada and other countries, about an aging population.

Let us consider what the United Nations (2002) says about aging as a global social issue. "The world is in the midst of a unique and irreversible process of demographic transition that will result in older populations everywhere. As fertility rates decline, the proportion of persons aged 60 and over is expected to double between 2007 and 2050, and their actual number will more than triple, reaching 2 billion by 2050. In most countries the number of those over 80 is likely to quadruple". The UN anticipates that the worldwide population of persons 80 and over in 2050 will be nearly 400 million.

My aims in this paper are to illustrate aging, which some view as a social problem and others as a door toward global economic restructuring and maturity (Picketty, 2014). I will be sharing ideas with you on an *occupational lens* and a *critical occupational lens* on occupational justice and occupational rights in response to two questions:

1. What is the *scope* of an occupational lens and a critical occupational lens to see justice and rights?
2. What is the *utility* of our occupational scope for interdisciplinary research on occupational justice and occupational rights, particularly for developing occupational literacy on justice and rights in daily life, and for social transformation?

My argument is that an occupational lens can provide a largely individualized, foreground perspective of the rich, complex details of daily life. In contrast, a critical occupational lens can provide a largely social, background perspective of the structures, policies, and other conditions that govern power to determine life's options and limits. The two parts of this argument are interconnected and complementary. An occupational lens may certainly portray stories of occupation in context. Conversely the powerful analyses of the macro environment and overall society that we can show with a critical occupational lens are richest with stories of daily life, illustrated here with a discussion of aging.

Narrative researchers can certainly expand on and critique my discussion of the largely individualized focus of an occupational lens to develop occupational stories and profiles. As well, we could have long discussions to develop the theories and methods for a critical epistemology. Here I have drawn inspiration as I have done for over 20 years largely from the theory and method of institutional ethnography for studying the social organization of the everyday world (Smith, 2006; Townsend, 1998, 2012, 2015; Townsend, Langille, Ripley, 2003; Proding, Rudman, Shaw, 2013). My analysis these days incorporates the educational, critical and feminist perspectives on aging associated with critical education, critical literacy, and critical gerontology (Darville, 1995; Findson, 2007; Formosa, 2005, 2012; Knobel & Lankshear, 2014; Stibbe, 2012).

To advance occupational science at this 20th Seminar, I will draw on my own life experiences, on the literature, and on ideas raised at the Third Joint Conference of the USA Society for the Study of Occupation (SSO) and the Canadian Society of Occupational Scientists (CSOS) held in Portland, Maine, USA. I have used Haneef's (2013) "research consolidation" approach with literature to respond to my two questions.

Discovery of Justice and Rights

Before considering the uniqueness of an occupational lens on justice and rights, let us all consider how we discovered an interest in justice and rights: Where? When? How? After many years as an occupational therapist in various health and community fields of practice, then as a university professor of occupational therapy, I discovered occupational science and an occupational perspective of health (Wilcock, 1998). The real turning point for me was when my PhD research showed a *Social Vision of Occupational Therapy* (Townsend, 1993, 1998). I took my discovery of an underlying social vision driving occupational therapy practice into my work on the eight Canadian guidelines for client-centred practice and enabling occupation that were published between 1989 and 2013 (Townsend & Polatajko, 2013), and other projects.

My discovery of *occupational* justice and occupational injustice emerged in the late 1990s when Ann Wilcock and I met for the first time on a lunch date in Adelaide, South Australia. When we talked about *why* occupational therapists are not enabling client-centred practice, we recognized the profession's tendency to accept individualized, medical, component-based frameworks for using occupational therapy to deal with bodily dysfunction and rarely to enable more equitable social participation. Now there is continuous consciousness raising as I see layers of my own privileged standpoint in being a Canadian woman who is white, and well educated.

And you? I invite you, the reader, to consider how you discovered an interest in justice and rights especially if you came to these ideas within your work as an occupational therapist or occupational scientist: Where? When? How? And with what privileged standpoint do you view occupational injustice and rights?

The ‘case’ of Ms Misao Shimamura

Let us start where stories often do with an individual, Ms. Misao Shimamura who is a 93-year old woman living out her working-class life in Japan (Marlow, 2016). She prompts us to reflect on older women as a group in particular places, and also on how the world’s aging population actually lives. Her comfortable daily life would be unimaginable to many seniors across the developed and developing world. As the Canadian newspaper article about her says, she worked part-time in a hotel for years. At 65 years she began working full-time as a janitor - retiring as a janitor when she was 85.

Her now-deceased husband was a barber. When he died she was concerned about burdening her three children. She applied to live in a senior’s apartment paid for by Japan’s long-term-care insurance program. With increasing needs for care, she moved to a long-term-care hospital where she is guaranteed good food, shelter, scheduled activities, and attentive care.

What is the Scope of an Occupational Lens to See Justice and Rights?

My first aim in this paper is to differentiate the scope of an occupational and critical occupational lens. Njelesani, Tang, Jonsson, Polatajko (2012) offered an essentially individualized, occupational perspective as “a way of looking at or thinking about human doing” (p. 233). An occupational lens is often equated with an occupational perspective for studying what matters to individuals in daily life, as in Wright-St Claire’s (2012) study of older indigenous adults in New Zealand. To me, an occupational lens gives us an *occupational perspective*, which is also an *occupational standpoint* on daily life. In other words, we can develop a rich *occupational literacy* to talk, write, and think, about daily life and the contexts that shape it; we can visually or otherwise portray daily life with the literacy necessary to explain the societal contexts of daily life (Townsend, 2015).

With an ethical stance of social inclusion, we can see how daily life is meaningful or not, just or unjust, inequitably for some more than others. With an occupational lens on the lives of individuals, we can imagine and reach out to develop occupational rights that create daily life possibilities especially for those who are poor, disabled, or

otherwise without privileged standpoints, and to understand and take action to resist limitations that undermine a just society where the rights of everyone are honored. Therefore, we can use an occupational lens to see human occupation in the everyday experiences of an aging population, with research partnerships for interdisciplinary studies with anthropologists, geographers, and others when they are available.

One image we can see through this lens is individuals engaged in life alone or together in couples or groups. An occupational lens would see that Ms. Shimamura is *doing, being, becoming and belonging* through her daily occupations (Wilcock, 2005) what the West tends to call *active aging or aging in place* (Johansson, Rudman, Mondaca, Park, Luborsky, Josephsson, Asaba, 2013). If we were assessing older individuals, we would want to ask and observe how older people are keeping the body, mind, and spirit active, and ask about their feelings and insights about old age. Older people may be any age from mid-life to the end of life. You can observe, interview, or survey older people about their daily lives. Our occupational lens should help us to see that Ms. Shimamura and others are intent on *being* who they are, not always pleasing other people. Maybe you will see and hear about them going to markets, traveling, looking after grandchildren, taking up hobbies, contributing on committees, or other civic occupations. They can tell us about the occupations they find meaningless or meaningful, and about occupations that prompt a sense of spirituality whether in Buddhism or other traditions. They have an opportunity for *becoming* their true selves as they pursue self-fulfillment, participate in society, retain their autonomy as individual personalities, and offer caregiving to grandchildren, other older people, or community members. Their occupations may or may not promote their individual sense of *belonging* as citizens in society who can collaborate with us verbally and in actions if they require occupational therapy services or that can be captured in occupational science narratives and other data.

With an individualized, occupational lens, we could profile specific occupational issues and her environment, such as how the paid and other occupations of Ms Shimamura are associated with change and loss in her life. We might observe occupations, inviting her or others to express ideas

and feelings about experiences of loss, sadness, joy, or other emotions through creative arts, or completing formal assessments to evaluate change. An occupational lens may see sensory deficits in vision loss, hearing loss, or tactile loss. The value of an occupational lens is the view of change these losses bring to occupations such as reading, visiting, homemaking, or community participation. Occupational disruptions may be associated with anything from skin allergies to serious cancers and neurological conditions such as Parkinson's Disease that require a new occupational identity, a new place in society. This segment of an aging population may ideally want to keep doing, being, becoming, and belonging within their capabilities (Bailliard, 2016), instead of losing hope and giving up as occupational possibilities slip away from them. For example, the loss of sensory function in vision, hearing, and other senses may drastically reduce occupational choices, especially when older drivers must give up their driver's license (Stepaniuk, Tuokko, McGee, Garrett, Benner, 2008). We can see this loss of occupational choice when family or staff persons make choices on what older people will wear, what food will be prepared for them. A common vision of lost occupational choices can be seen when older people are gathered for group activities or taken on outings as a group to places that may be lovely. We can bridge theories of occupational justice and practices to see occupational injustice in that there are few or no choices available to them if they wish to socialize indoors or go outdoors (Nilsson & Townsend, 2010).

In essence an occupational lens can see how an aging population experiences daily life and life changes. Our occupational lens is truly a gift that we have yet to develop beyond our main use of this lens for seeing the body and occupational performance in medical contexts. This lens can create views of the richness and depth of occupational experiences in people's lives, but it lacks a critical analysis to understand the broad systemic context shaping life, especially to see how power relations are working to promote or undermine justice and rights for some more than others.

What is the Scope of a Critical Occupational Lens to See Justice and Rights?

The scope of a critical occupational lens may start or be

illustrated with stories of daily life. However, a simple difference from an occupational lens is that a critical lens focuses on asking *why* daily life is structured and governed by power relations as it is (Cutchin, Aldrich, Bailliard, Coppola, 2008; Laliberte Rudman, 2014; Farias, Laliberte Rudman, Magalhães, 2016). With a critical occupational lens, we are reminded to profile and analyze the interconnections and impacts on daily life by the dominant ideologies, buildings, policies, budgets, and laws that determine occupational possibilities and limits.

As Farias, Laliberte Rudman, and Magalhães (2016) argued (and I strongly agree), we need a *critical* occupational lens to see the scope of potential occupational injustices and occupational rights. We also need openness to diverse definitions of occupation and justice or injustice. Ann Wilcock and I have resisted having one single definition of occupational injustice because it depends on the cultural context, including the values, philosophies around equity, and beliefs in each culture. The general definition that Wilcock and I published in 2004 then in 2013 with Stadnyk (Stadnyk, Townsend, Wilcock, 2010) still holds in my view that occupational injustice occurs when people are: "...barred, confined, segregated, prohibited, undeveloped, disrupted, alienated, marginalized, exploited, excluded or otherwise restricted", from participation in the occupations they find meaningful and useful.

The view of *power* with a critical occupational lens is immense, linking an analysis of daily life and society. The starting points to analyze power can be narratives of daily life with questions about the societal or governmental practices that make life work in a particular way in a particular context OR, conversely, policy, legal, and economic analyses can be traced to the realities of daily life participation for populations of interest. With this context-oriented view of daily life, we can see the ways in which dominant ideas or ideology tend to be embedded in each policy or structure, based on taken-for-granted cultural norms and routine ways to regulate society.

For example, the dominance of medical ideology in Western society and increasingly in Eastern contexts is not limited to health services. To qualify for social supports at home, or to qualify for admission to a seniors' residence, or

to qualify for a driver's license in Canada at least, an older person often requires a medical statement that the person has capabilities to manage a particular occupation, even though physicians are not experts in occupation. Occupational therapists who know occupational capabilities may be authorized to prescribe wheelchairs and assistive devices. But we often lack the authority to assert the power, for instance, to approve someone's admission to a seniors' facility.

To see the scope of a critical occupational lens on aging, justice and rights, you might want to ask why some places where seniors live in Japan can or cannot accommodate diversity related to gender, economic status, culture, or religion. You could ask how older men and women with diverse capabilities in their family home or care facilities can establish new habits and routines that emphasize safety but also accommodate their capabilities and hopes for doing something meaningful in their older years (Johansson, Rudman, Mondaca, Park, Luborsky, Josephsson, Asaba, 2013). Your analysis may identify situations where elder abuse and addictions persist. With a critical occupational lens you could ask why elder abuse and addictions persist as social problems.

With knowledge of socio-cultural-political impacts on human occupation, a critical occupational analysis offers both new knowledge and a road map for action. For example, if your analysis shows that accessible, affordable transportation limits community participation for some rural seniors with chronic conditions and disabilities in some parts of Japan but not other parts, you can identify the policies, laws and funding for social change to improve transportation and participation by seniors in that prefecture.

Early on Wilcock and I (Townsend & Wilcock, 2004; Wilcock & Townsend, 2000) named four social problems as occupational injustice. Recent conceptual reviews and mapping of occupational justice ideas to date are timely to push thinking beyond the founding ideas (Durocher, Gibson, and Rappolt, 2014; Durocher, Gibson, Rappolt, 2014; Gupta, 2016; Malfitano, de Souza, Lopes, 2016). Still we can use the founding scope of four concepts to ask, with a critical lens, would Ms. Shimamura experience

occupational alienation in her insurance-funded facility with activities and supports? Occupational alienation refers to structures and systems that leave some older people more than others being alienated from meaningful occupations. Older adults routinely experience occupational alienation, for instance, when internet technology requires new equipment and new learning without an educational strategy for them to learn this.

Would Ms. Shimamura and others experience occupational deprivation in old age? Occupational deprivation is deprivation for a population, such as all persons in nursing facilities. Occupational deprivation in old age would exist where there is restricted participation in occupations that are needed for a healthy body, mind, and spirit. Occupational deprivation in daily life occupations may occur if participation in society is restricted to older people because of limited accessible transportation, or limited community accessibility.

Occupational marginalization is a third social problem named by Wilcock and I. Ms. Shimamura may be subjected to occupational marginalization. However there are many places worldwide where you would find limited health, social and educational services for older people, such as a lack of home care with personalized occupational therapy.

A fourth social problem was named occupational imbalance. Occupational imbalance may occur when older adults are sitting around home or residences with too little to do or without anything meaningful to do. Conversely some older adults, like Ms. Shimamura, may be overwhelmed with too much to do if they are raising grandchildren while parents are employed or because of the loss of parents.

As we reflect on occupational injustice, how do structural conditions restrict the occupations of Ms. Shimamura or other seniors you know? Do their occupations enable them to retain autonomy, self-fulfillment, participation in desired occupations, a positive occupational identity, and dignity? Do you know age-friendly towns and cities in Japan that have been designed for everyone to manage daily life where they live, and to participate in their community?

What is the utility of this scope for interdisciplinary research on occupational justice and occupational rights?

My second aim in this paper is to ask questions about the utility or usefulness of the scope of our occupational lens and critical occupational lens, particularly for developing occupational literacy on justice and rights in daily life, and for social transformation. What can we do with this knowledge?

First, consider the utility of our occupational scope for literacy education. In my view, an important usefulness of this knowledge is to develop comfort and competence in the language and ideas of occupation, as one would do with any

kind of literacy. In my Dr. Ruth Zemke Lectureship (Townsend, 2015), I introduced critical occupational literacy for thinking about occupational justice and aging in everyday life. One does not need to use the term ‘occupation’ where the breadth of intent in occupational science would not be understood. Literacy means finding terminology to think and talk about daily life when occupation is known only as work, and to open conversations with an understandable discussion of inequity in daily life.

I offer four key points for occupational literacy education content, sites, and audiences where we could use occupational literacy.

Table 1: Education for Occupational Literacy on Occupational Justice and Rights for Aging Populations
Research and implementation of occupational literacy is essential for occupational scientists and others to think about the details of daily life, to talk with others about daily life, and to write about daily life and take action. For example, you could educate team members and clients in health services or the community that your occupational lens may offer insights on older persons’ habits, their sense of meaning, their changing identities and other features beyond measuring the body or doing cognitive function assessments. You could also frame research questions around learning how to use a critical occupational lens for research, for example on aging.
Occupational literacy can be used to ask critical questions on daily life issues. For an aging population, you could look at the potential for occupational deprivation where people live without the occupations that they find meaningful.
Analyze the forces that shape daily life and consider how to go about risk taking to participate with others in social transformation, for instance to introduce gardens in seniors facilities.
Occupational and critical occupational literacy can be useful to look at social inequity given that some groups in societies have privileges to engage in some occupations. Seniors may have resources for aging in place in their own homes with support services as needed, but homeless older people who are aging in place in shelters merely survive.

I know that developing *occupational literacy* and *critical occupational literacy* presents many challenges especially if you also need *medical literacy* – to understand disease processes, use medical terminology, interpret the functional implications of medical diagnoses, and manage occupational therapy patients in medical systems. Yet you may enjoy having occupational literacy to think, talk, and write about the details and influences on daily life occupations to make a unique contribution on aging.

Second, consider the utility of our occupational scope for actions to prompt social transformation. Rudman’s 2013 Dr. Ruth Zemke Lecture reinforces my point that the usefulness of a critical occupational lens can be to name and stand up for occupational justice and the occupational rights in our research. There is so much to do, yet there are many challenges to use ideas about justice and rights that are already complex before we bring our occupational scope of interests into the picture (Bailliard, 2016; Sen,

2009). In particular, we need to recognize that occupations may not be health promoting, and concerns for occupational injustice may not recognize the ongoing dynamics of hegemony – our tendency to reinforce the existing social order even as we hope to promote social transformation.

The 2nd edition of *Occupational Therapies without Borders*, is subtitled *Integrating Justice with Practice*, (Pollard & Dikaio, 2017), including two Japanese authors and a wealth of social transformation examples based on using an occupational lens and a critical occupational lens. Interdisciplinary research could examine the experiences and social structures that have enabled or are still problems for Ms. Shimamura and many older persons in Japan. For example you will know in Japan about wide advertising that the Bullet Train, or Shinkansen, advertises spaces for wheelchairs (including a private compartment if needed) and a toilet that is large enough to handle a wheelchair. In 2000, the *kaigo hoken* (long-term-care insurance) law was passed as we read in Ms. Shimamura's story (Marlow, 2016).

Ultimately, I see the utility of our occupational scope in interdisciplinary research that could resonate with the 2002 Madrid International Plan of Action on Ageing. The Political Declaration and the Madrid International Plan of Action on Ageing states: "A society for all ages encompasses the goal of providing older persons with the opportunity to continue contributing to society. To work towards this goal, it is necessary to remove whatever excludes or discriminates against them." As we take up research and practices to transform occupational injustice and occupational rights, occupational scientists and occupational therapists would be showing courage for taking risks to advocate against inequity in research and in society overall. With an aging problem there is much to be gained by seeing both social problems and social advantages.

A forceful link to prompt social transformation against occupational injustice is to show how occupational injustice undermines occupational rights (Hammell, 2015a, 2015b). A fuller discussion on occupational rights in aging would require another paper beyond this introduction. In Japan, Lawson's web-based advertising says that, "The percentage

of single or two-person independent households among people older than 65 increased from 36.9% in 1990 to 52.3% in 2007 and is still increasing rapidly by more than 1 million people a year." For corporations such as Lawson Inc., a Tokyo-based convenience store chain with 12,000 stores in Japan, the country's aging society is a reality, as well as a business opportunity (Picketty, 2014) that may undermine occupational rights.

With data on Japan, I encourage you to look at the United Nations Principles for Older Persons (1999) listing 18 entitlements for older persons, grouped into four categories to address self-fulfillment, participation in society, entitlement to receive care as needed or to care for others, and entitlement to dignity. In recognizing that injustice and rights are connected, Wilcock and I (2004) named four occupational rights, mirroring conditions of occupational justice. These occupational rights seem to resonate with the United Nations Principles: the right to experience occupation as meaningful and enriching; the right to develop through participation in occupations; the right to assert autonomy through choice in occupations; and the right to benefit from privileges in occupation. Occupational rights are captured as well in different words in the World Federation of Occupational Therapists (WFOT) Position Statement on Human Rights (2006). As an outgoing WFOT Co-Chair with Dr. Clare Hocking (New Zealand) of the International Advisory Group (IAG) on Human Rights, I strongly urge readers to follow up on this brief introduction as a targeted concern for occupation in relation to human rights. I hope we can ensure that social inclusion of older people is embedded in actions for social transformation.

Summary

In differentiating an occupational lens and critical occupational lens, the scope of an *occupational lens* can show the richness of individual experiences of injustice and a lack of rights in daily life. However, we need to use the scope of a *critical occupational lens* to truly see the lack of occupational justice and occupational rights for aging and other populations. To develop practices for advancing occupational justice and occupational rights, for an aging and other populations, we can learn occupational literacy in thinking, talking, writing and being public advocates for social transformation ... toward the visionary goal of

occupationally just societies for all ages, including our aging populations.

REFERENCES

- Bailliard, A. (2016). Justice, difference, and the capability to function. *Journal of Occupational Science*, 23(1), 3-16. doi:10.1080/14427591.2014.957886
- Cutchin, M. P., Aldrich, R. M., Bailliard, A. L., & Coppola, S. (2008). Action theories for occupational science: the contributions of Dewey and Bourdieu. *Journal of Occupational Science*, 15(3), 157-165. doi:10.1080/14427591.2008.9686625
- Darville, R. (1995). Literacy, experience, power. In M. Campbell & A. Manicom (Eds.), *Knowledge, experience, and ruling relations: studies in the social organization of knowledge* (pp. 249-282). Toronto, ON: University of Toronto Press.
- Durocher, E., Gibson, B. E., & Rappolt, S. (2014). Occupational justice: a conceptual review. *Journal of Occupational Science*, 21(4), 418-430. doi:10.1080/14427591.2013.775692
- Durocher, E., Rappolt, S., & Gibson, S. (2014). Occupational justice: future directions. *Journal of Occupational Science*, 21(4), 431-442. doi:10.1080/14427591.2013.775693
- Farias, L., Rudman, L.R., & Magalhães, L. (2016). Illustrating the importance of critical epistemology to realize the promise of occupational justice. *OTJR: Occupation, Participation and Health*, 36(4) 234-243. doi:10.1177/1539449216665561
- Findsen, B. (2007). Freirean philosophy and pedagogy in the adult education context: the case of older adult learning. *Studies in Philosophy and Education*, 26(6), 545-559. doi:10.1007/s11217-007-9063-1
- Formosa, M. (2005). Feminism and critical educational gerontology: an agenda for good practice. *Ageing International*, 30(4), 396-411. doi:10.1007/s12126-005-1023-x
- Formosa, M. (2012). Education and older adults at the University of the Third Age. *Educational Gerontology*, 38(1), 1-13. doi:10.1080/03601277.2010.515910
- Formosa, M. (2014). The end of the world as we know it. Retrieved October 3, 2014 from http://www.maltatoday.com.mt/news/interview/40591/the_end_of_the_world_as_we_know_it_marvin_formosa#. VC7h8Of8WgJ
- Gupta, J. (2016). Mapping the evolving ideas of occupational justice: a conceptual analysis. *OTJR: Occupation, Participation and Health*, 36(4), 179-194. doi:10.1177/1539449216672171
- Hammell, K.W. (2015a). Participation and occupation: the need for a human rights perspective (Editorial). *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 82(1), 4-8. doi:10.1177/0008417414567636
- Hammell, K. W. (2015b). Quality of life, participation and occupational rights: a capabilities perspective. *Australian Occupational Therapy Journal*, 62(2), 78-85. doi:10.1111/1440-1630.12183
- Haneef, N. (2013). Empirical research consolidation: a generic overview and a classification scheme for methods. *Quality & Quantity*, 47(1), 383-410. doi:10.1007/s11135-011-9524-z
- Johansson, K., Rudman, D. L., Mondaca, M., Park, M., Luborsky, M., Josephsson, S., & Asaba, E. (2013). Moving beyond 'aging in place' to understand migration and aging: place making and the centrality of occupation. *Journal of Occupational Science*, 20(2), 108-119. doi:10.1080/14427591.2012.735613
- Knobel, M., & Lankshear, C. (2014). Studying new literacies. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 58(2), 97-101. doi:10.1002/jaal.314
- Malfitano, A.P.S., de Souza, R.G.M. & Lopes, R.E. (2016). Occupational justice and its related concepts: an historical and thematic scoping review. *OTJR: Occupation, Participation and Health*, 36(4) 167-178. doi:10.1177/1539449216669133
- Marlow, I. (2016). Japan's Bold Steps, The Globe and Mail, <https://www.theglobeandmail.com/globe-investor/retirement/retire-planning/how-japan-is-coping-with-a-rapidly-aging-population/article27259703/>
- Nilsson, I., & Townsend, E. A. (2010). Occupational justice: bridging theory and practice. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 17(S1), 57-63. doi:10.3109/11038128.2014.952906
- Njelesani, J., Tang, A., Jonsson, H., & Polatajko, H. (2012). Articulating an occupational perspective. *Journal of Occupational Science*, 21(2), 226-235. doi:10.1080/14427591.2012.717500
- Piketty, T. (2014). *Capital in the 21st century*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.

- Prodinge, B., Rudman, L.D., & Shaw, L. (2013). Institutional ethnography: studying the situated nature of human occupation. *Journal of Occupational Science*, 22(1), 71-81. doi:10.1080/14427591.2013.813429
- Rudman, L.D. (2014). Embracing and enacting an 'occupational imagination': occupational science as transformative. *Journal of Occupational Science*, 21(4), 373-388. doi:10.1080/14427591.2014.888970
- Sen, A. (2009). *The idea of justice*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.
- Smith, D. E. (2006). *Institutional ethnography as practice*. New York, NY: Rowman & Littlefield.
- Stadnyk, R., Townsend, E. A., & Wilcock, A. A. (2010). Occupational justice. In C. Christiansen & E. A. Townsend (Eds.), *Introduction to occupation: the art and science of living* (2nd ed., pp. 329-358). Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- Stepaniuk, J. A., Tuokko, H. A., McGee, P., Garrett, D. D., & Benner, E. L. (2008). Impact of transit training and free bus pass on public transportation use by older drivers. *Preventive Medicine*, 47(3), 335-337. doi:10.1016/j.ypmed.2008.03.002
- Stibbe, A. (Ed.). (2012). *A handbook of sustainability literacy: skills for a changing world*. Devon, UK: Green Books.
- Townsend, E. A. (1998). *Good intentions overruled: A critique of empowerment in the routine organization of mental health services*. Toronto, ON: University of Toronto Press.
- Townsend, E. A. (2012). Boundaries and bridges to adult mental health: critical occupational and capabilities perspectives of justice. *Journal of Occupational Science*, 19(1), 8-24. doi:10.1080/14427591.2011.639723
- Townsend, E.A. (1993). Occupational therapy's social vision/notre vision sociale en ergotherapie. Muriel Driver Memorial Lecture. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 60, 174-184. doi:10.1177/000841749306000403
- Townsend, E.A., & Polatajko, H.P. (2013). *Enabling occupation II: advancing an occupational therapy vision of health, well-being and justice through occupation*. (2nd ed). Ottawa, ON: CAOT Publications ACE.
- Townsend, E. A., Langille, L., & Ripley, D. (2003). Professional tensions in client-centred practice: using institutional ethnography for understanding and transformation. *American Journal of Occupational Therapy*, 57(1), 17-28. doi:10.5014/ajot.57.1.17
- Townsend, E. A., & Wilcock, A. A. (2004). Occupational justice and client-centred practice: a dialogue in progress. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 71(2), 75-87.
- United Nations. (1999). Principles for older persons Retrieved from <https://www.un.org/development/desa/ageing/resources/international-year-of-older-persons-1999/principles.html>
- United Nations. (2002). Second world assembly on ageing (8 - 12 April 2002 - Madrid, Spain) http://www.un.org/en/events/pastevents/ageing_assembly2.shtml
- Wicks A., & Jamieson, M. (2014). New ways for occupational scientists to tackle "wicked problems" impacting population health. *Journal of Occupational Science*, 21(1), 81-85. doi:10.1080/14427591.2014.878208
- Wilcock, A.A. (2005). Occupational science: bridging occupation and health. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 72, 5-12. doi: 10.1177/000841740507200105
- Wilcock, A. A. (1998). *An occupational perspective of health*. Thorofare, NJ: Slack.
- Wilcock, A. A., & Townsend, E. A. (2000). Occupational terminology interactive dialogue: occupational justice. *Journal of Occupational Science*, 7(2), 84-86. doi:10.1080/14427591.2000.9686470
- Wright-St Clair, V. (2012). Being occupied with what matters in advanced age. *Journal of Occupational Science*, 19(1), 44-53. doi:10.1080/14427591.2011.639135
- World Federation of Occupational Therapists. (2006). *Position statement on human rights*. Retrieved from www.wfot.com, August 25, 2013.